

## 正覚院の お稲荷さま



昔は正覚院の境内を通り抜けることが出来ましたが、夕方からは皆こわがって通りませんでした。油あげなど持つて通ると必ずなくなってしまうし、どうしても山門さんもんの所へ出ることが出来ず、ぐるぐると墓地の中をうろつきまわっていたり、満月ほどの青白い光の玉が（俗にいうオトカッピ）空へのほっていくのをみたり、とにかく正覚院の森にはキツネがいるという事はみんな知っていた様ですが、正覚院に稲荷社があることを知っている人は今では少ないのではないのでしょうか。事のおこりは、何しろ二百三十年も昔のことなのです。正覚院の住職さまは、暑さあたりのせいでしょうか高い熱が出てしまい、どの様な薬をのんでも熱はさがりません。住職さまはどんどん弱っていつてしま

いました。そんな時

「なんでも同円どうえんという坊様が稲荷様の巻物をひろげてる御祈禱ごごらうは、とてもよくきくからおがんでもらったらいいですよ。」

と教えてくれる人がありましたので、住職さまは、今にも死にそうでしたが、やっどのおもいで同円坊の所へたどりつきました。すると、誰かが耳もとでささやきました。

「あの稲荷様の巻物を口にくわえて、ひと息すいこみなさい。」

住職様は教えられた通り、巻物を口にくわえ力をふりしはって「スーッ。」と息をすいこみました。なんと、その吸い込んだ息のつめたいことぐまるで氷水を「ゴクン」と飲みこんだ様でした……。すると、今まであれほど苦しくてどうしようもなかったのが「スーッ」と楽になってしまいました。住職様は

「マカ、フシギ。どうしたわけじゃ。」

とそばにいる人にたずねましたが、みんな首を横にふるばかりでした。住職様は大喜びで元氣よく正覚院へ帰りました。「願ひ事は必ずかなえてくれる」「わざわいは、はらってくれる」と稲荷様の評判はたいへんなものでした。

しばらくして、巻物に書いてあるような赤と白のキツネ

が、正覚院の森の中をウロウロしているのを見たという人が多くなりました。「同円坊のお稲荷様はすこい」ということで人々はさきを争っておまいりをしました。そこで住職様は、同円坊にお願いをして、倉稲魂神くらいのみたまがみと赤白のキツネが書かれているお稲荷様の御神体の巻物を、正覚院に寄付してもらい、本堂裏に社やしろを建てておまつりをしました。

靈験たえる事なく、今でも願ひ事は必ずかなえて下さるそうです。社の中には願がかなったお札に納められたおキツネ様が五百以上ズラリと並んでいます。二月のはつひ初午の時だけ扉がひらかれることになっっています。お参りにいらして下さい。

